Veritas No.14(2001.4.2)(新入生歓迎特集号)

目次　　（敬称略）

＜「本との出会い」ー新入生へのメッセージ＞

真栄平房昭

＜新入生へー読んでほしい本、図書館との付き合い方＞

Philip C. MacLellan　　石川康宏　　津上智実　　出口弘　　遠藤 知二

＜図書館探索＞

無断転載を禁ず

＜「本との出会い」ー新入生へのメッセージ＞

真栄平房昭　図書館長 総合文化学科教授

青春時代の出会い

人間には、さまざまな人生の節目や転機があります。皆さんの場合、それは大学に入学したばかりのいま、二十歳前後の青春時代が人生にとって大切な節目になるでしょう。

これから大学生として、さまざまなクラブやサークル活動などを通じて、多くの友人との出会いがあります。さらに大学で重要なことは、いうまでもなく専門知識を身につけることによって自己の才能を磨き、高校時代とはちがう自分へ、人間的に成長していくことです。

人間の魅力を女性の化粧にたとえると、顔の「表面」を艶やかに磨きたてるだけではなく、その人の「内面」から光を放つ知性を真剣に磨く必要があるでしょう。そのためには、さまざまな知識の光を与えてくれる情報源としての書物と多くめぐりあうチャンスが必要です。

「本」の世界には、人びとが数千年の昔から蓄積してきた情報、つまり人類の知的遺産が凝縮されています。それらの情報から学び、知性を磨くことは、２１世紀という困難な時代を生きていかねばならない私たちの人生を豊かにしてくれるはずです。

大学時代にめぐりあった本は、私自身にとっても大切な「一生の宝物」となっています。さまざまな悩みを抱え、進むべき道に迷ったとき、自分を繰り返し励ましてくれたのは、身近な人のアドバイスや何気ない一言だったり、大学時代に偶然出会った１冊の本だったりします。

「知的空間」としての図書館

神戸女学院の図書館には、膨大な数の蔵書があります。新刊本はもちろん、１００年以上も昔、明治時代にはるばる欧米から輸入された洋書や、江戸時代に海を越えて日本にもたらされた中国の漢籍などもあります。

女学院の先輩たちが何度も繰り返して読んで感動し、ふとこぼした「涙」の跡がにじんだ文学書や古典などもあります。図書館の棚をみると、実にさまざまな表情や性格をもった無数の「本」たちが並んでいます。それらを手にとって本が語りかける言葉に耳を傾けることによって、わたしたちは日本だけでなく世界に眼をひらき、アジアやヨーロッパのさまざまな異文化にふれるこ

とができるはずです。

図書館は、大学生活を実り豊かにしてくれる「知的空間」なのです。これまでは大学受験勉強で忙しく、読みたい本があっても時間的に読めなかった人も多いでしょう。また、テレビや雑誌の情報には詳しいが本格的な読書とは縁が薄く、難しそうな専門書の表紙を見ただけでクラクラめまいがする人、あるいは図書館は「敷居が高くて苦手」と誤解している人がいるかもしれません。これからは大学生活の４年間を過ごす図書館に気軽に足を運び、新入生の「君」たちの訪問を待っている多くの本と出会いを楽しんで下さい。

新入生の皆さんが、大学図書館を大いに活用してくれることを心から願っています。

＜　新入生へー読んでほしい本、図書館との付き合い方＞

Philip C. MacLellan 英文学科専任講師

To read without reflecting is like eating without digesting.

-Edmund Burke

A book, like food, is a valuable tool that contributes to a human’s healthy mind and body. However, like food on a plate, a book on a library shelf is not useful. It becomes valuable to us only when we actively use it, and for books, the more active we are as we read, the more useful the book becomes. By reflecting on the author’s ideas as we read the pages, actively thinking about how these ideas compare with our own ideas and experiences, and allowing our ideas to be challenged, changed, supported or enhanced, we can enjoy reading even heavy books without getting indigestion. The ideas that we actively reflect on can lead to new understandings that will last a lifetime. As you enter Kobe College, I encourage you to begin an enjoyable lifelong journey of active book reading. For the mind, this is the healthiest diet.

石川康宏　総合文化学科助教授

「ワルモノ流」図書館利用のすすめ

入学おめでとう。今日は図書館のオススメ利用法だ。

1)まず人間の知恵にどれだけの幅と深みがあるのか，それを確かめてみよう。それには本の背表紙を眺めながら本棚の前を端から端まで歩いてみるのがいい。

2)そして「ややっ，これは」と思った本は開いてみよう。ここで読むのは目次やどこか１ページだけでもいい。大学は「学ばされる」ところじゃなく「自分で学ぶ」ところだから，こうやって読みたい本を自分で探す姿勢をもつのはとても大切だ。

3)「ややっ」の本がホントに「やややっ」だったら，それを机に向かって読む。この時にはペンとノートが必要だ。新しく知ったこと，思いついたこと，ヘンだと思ったこと等を，どんどんノートに書いていく。読むことの目的はあたまを鍛えることで，中身を覚えることじゃあない。なぐり書きノートがたまるにつれて「自分なりの個性ある考え方」が育っていく。これが楽しいのよ。

4)図書館は生活のリズムづくりにも利用できる。もちろん昼寝のすすめではない。キミたちは夜と昼がひっくり返りやすい。そこで時間を決めてここに入り，生活にまっとうなメリハリをつけるのだ。これ以外の図書館利用法を発見したら，ぜひ「ワルモノページ」（http://www5.ocn.ne.jp/~walumono）まで連絡してくれ。じゃあ！

飛行機に乗る「ワルモノ」（石川先生のページから拝借しました）

津上智実　音楽学部教授

専門領域の推薦図書：　ケヴィン・バザーナ『グレン・グールド演奏術』
（白水社、2000 年、3,969 円）

昨秋、サダコ・グエンによる邦訳が出て話題を読んだ本です。没後 20 年近くなるというのに、次々と新しい本が出続ける不思議なカナダ人ピアニスト、グレン・グールド（1932～82）。時に突拍子もなく思えるグールドの演奏が、どのような解釈、どのような理念のもとで構築されていたのかを解き明かした画期的な本です。極端な（猛烈に速いあるいは遅い）テンポ設定、楽譜の指示に逆らった強弱の設定など、その「常識」外れの演奏を支えていたものを考える事は、とりもなおさず読む者に演奏に関する「常識」の洗い直しを迫ってきます。その意味で、グールドを好きな人のみならず、嫌いな人にとっても、あるいは知らない人にとっても一読の価値がある本です。巻末にはグールドの演奏を 26 曲収めた CD が 1 枚付いていてお得です。

最近読んでおもしろかった本：　古木宜志子『津田梅子』（清水書院、1992 年、735 円）

NHK 番組「その時歴史は動いた」でたまたま津田梅子の生い立ちと津田塾創設の経緯を知り、女学院の歴史と重なって興味深く思ったのがきっかけで読んだ本です。アメリカの女子教育の高まりを受けて同時期に始動したことは歴史の大きな流れを感じさせますし、強固な宗教心に支えられたそのヒューマニスティックな教育の理念はきわめて高いもので、心からの尊敬を覚えます。他の私学女子大の創設者であるとはいえ、図書館に津田梅子関連の書籍がないのは残念です。語録や書簡集（アメリカの養母に宛てて膨大な書簡を書いています）を備えて頂けると、女学院を理解する上でも有効な視点を与えてくれると思います。
☆☆☆『グレン・グールド演奏術』、『津田梅子』は発注中です。

☆☆☆『グレン・グールド演奏術』(780.92/GO1A)、『津田梅子』(920/SI3/V.116)、『津田梅子文書』(923.7/TO1)、The Attic Letters : Umeko Tsuda's Correspondence to Her American Mother (923/TS2)は図書館新館に所蔵しています。(2001.7.6.追記)

出口 弘　人間科学部助教授

３月に入って早々に“大学に入学して学生生活を始めるにあたって「読んでほしい本」「図書館との付き合い方」などをテーマにして原稿をお寄せいただけませんでしょうか。”と図書館のMさんに電子メールで頼まれてしまった。が、しかし、私は本を殆ど読まないし、図書館で勉強した記憶も殆どない！絵や図も無い文字ばかりの長い文書などは読む気にもなれない！！こんな私に何を書けとおっしゃるのか？

図書館というものとの出会いは、小学校の図書の時間、図書館というより図書室だが…この図書の時間が苦痛以外の何物でもなかったし、図鑑の類ばかりを見ていて怒られた記憶だけが残っている。夏休みの工作は楽しかったが、課題図書の読書感想文は地獄だった。時代の申し子ともいうべきテレビっ子なのかもしれない。中学生の時には「テレビ中毒白雉症」と国語の先生に診断された。そして国語嫌いになった。（他人の所為にするな！）中学のときはそうでもなかったが、高校に入って語と史の付く科目（要するに古文、漢文を含めて国語、英語、日本史、世界史の類）は超低空飛行だった。数学が分からなくなって文科系に進むコースも有りだが、逆のコースも有る。

大学に入ってからは第２外国語のドイツ語の所為で（もちろんそうじゃなくってそれを真面目に勉強しなかった所為なのだが…）危うく留年するところであった。そう、そのドイツ語は、クラスの選択に当たって近所の先輩が教えて下さった、優しい先生（要するに単位をくれるってこと！）のクラスになれたのだが結果は大違い！何でやねん？…後で分かった話なのだが、私たちと同じ年に受験した彼の息子さんが不合格だったとか…情報って常に過去の物になるという教訓！？

さて、こんな私であったが、専門のコンピュータ関係の論文や書籍やマニュアルは、英語であっても、よく読んだ。当時の日本語訳のマニュアルはあったとしても誤訳が酷くて、「この意味不明な文章は、あの構文の誤訳から来ている！」等と原文を想像してから理解したものだ。英語は斜め読みができるほど得意にはなれなかったので、訳本があったら頼ってしまうが…

物、所謂文明の利器の使い方が分からない時に、安易に他人に聞かずに、マニュアルの類はとことん繰り返し読んでみることはお勧めできる。理解できて使えるようになったら本望だし、理解に苦しめば、分かり易い文章を書くための反面教師として役立てれば良い。

良い文章が書けるようになるためには、多くの良い文章を読むことが必要であると言われているので、図書館を利用して只で（本当は高い授業料を払っているのだが…）読める本を沢山読んで下さい。自分が出来ないことや出来なかったことを他人に強いることが許されている特権？

を行使したいと思います。将来、このような原稿依頼があった時に、今の私のように苦しまなくても済むように！

「大学に入学して学生生活を始めるにあたって読んで欲しい…」という観点から言わせてもらうと、入学時に配布された学習便覧やガイドブック等の資料や学内随所にある掲示板をしっかり読んで欲しいと思います。但し、自分に都合の良いように勝手な解釈はしないように気をつけながら！

「図書館との付き合い方」という観点からは、大学に入ると上級生になってゼミ配属になるまでは、高校までのようにホームルームとかが無くて、自分の居場所が無いような気がするかもしれません。そんな時には、社交館もかなり改善されましたが、図書館に行きましょう。図書の閲覧だけでなく、情報検索もできるし、ぼーっと過ごすこともできます。のんびり過ごすには本館が良いと思います。そしてたまには勉強しましょう！！（失礼）

遠藤知二　人間科学部助教授

新入生のみなさん、入学おめでとう。私の感覚では、時間をもてあましてつい本に手を出してしまうなどという、けしからぬ楽しみに耽ることに目覚めるのが大学生なのだけれど、それはもう昔の話なのだろうか。それでも（何がそれでもなのか、よくわからないけど）、ここは大学のせんせーらしく、大学生のための読書の指針を開陳してみよう（何といっても、そういうコーナーなのだ、これは）。

その１。「人の読んでいない本を読め。」どうやって個性なんてものができるのか知らないし、べつにそれほど知りたくもないのだけれど、書物から学んだことがらは、いったいどれくらいその人の個性に影響を与えているのだろう？　ほんのわずかかもしれない。でも、私たちの頭のなかにあるのは所詮ミームなのだし（いいのか、こんなこといって）、そのミームを得るのに、これだけ種類が豊富にそろっている本を読まない手はない。そして、人と同じではないミーム構成をもったユニークな人間になることが、ふつうは最後の教育期間となる大学４年間でめざすべき最大の課題ではないだろうか。だから、人と違う本を読むこと。え？　ミームって何だって？　知りたい人は、ドーキンス『利己的な遺伝子』、ブラックモア『ミーム・マシーンとしての私』でも読んで、ミームのミームに染まって下さい。

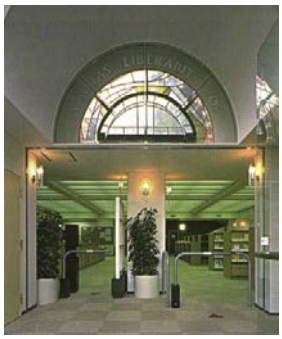
その２。「人の読んでいる本を読め。」なにしろ、こんな本を読みなさいと紹介して、もしみんなが読んだら（そんなことにはならないだろうけど）、ちっとも人の読んでいない本を読んだことにはならない。だから私はそんなの読まないと言われたのでは、せんせーとしては少し慌ててしまう。人が読んでいる本を読むこともまた重要なのだ。それでこそ同じ話題が共有できて、豊かな会話が成立する。それなら TV でもいいかというと…、それじゃあ知的にみえないじゃないか。

　その１とその２、いったいどっちが言いたいのかって？　いや、答えは簡単。その３。「できるかぎりたくさん本を読め。」本を読み尽くすことはできない以上、たくさん本を読むことでこの２つの指針を両立させることができる。そのために、そう、大学の図書館がある。

☆☆☆『利己的な遺伝子』(508/KI1/V.9)、『ミーム・マシーンとしての私』(304/BL3/ V.1-2)は図書館新館に所蔵しています。

＜図書館探索＞

〃 VERITAS LIBERABIT VOS 〃



図書館新館エントランスホール

２枚のガラス扉を通って図書館新館のエントランスホールに入ったなら、ちょっと立ち止まって上をみて下さい。すると頭上にエントランスのステンドグラスを映すアーチ状の鏡が見えます。そこには〃VERITAS LIBERABIT VOS〃というラテン語が浮かび上がっています。これは「真理はあなたたちを自由にする」という聖書（ヨハネによる福音書第８章３２節）の中の言葉です。

図書館新館閲覧室

１９８４年９月にこの言葉を入口に掲げてオープンしたこの地上４階、地下２階にわたる空間が利用者のみなさまに提供してきたのはどのような１７年間だったでしょうか。

閲覧室の吹抜になった大きな窓から差し込むやわらかな光に包まれて、必死で課題に取り組む人、本の世界に埋没している人、思索に耽ける人、静謐な図書館の各フロアーでの過ごし方は人それぞれです。

１９９３年４月、図書館蔵書データのコンピュータ検索開始を機にその”真理”を意味する『VERITAS』という名前の図書館だよりを創刊いたしました。

この『ＶＥＲＩＴＡＳ』が真理を究めるための情報提供を使命とする図書館と利用者の方々とのコミュニケーションに役立ち、皆様に親しまれ、より充実したものへと育って行くこと（創刊号より）
を願って印刷されたＡ４用紙１枚からのスタート。時を経て１９９９年６月発行の第７号からは図書館ニューズレターとしてオンラインで発行しています。みなさん、どうぞご自身の真理探しのために図書館と図書館ホームページをご活用下さい。

図書館新館４階閲覧室のステンドグラス
☆☆☆（Veritas 創刊号をご覧になりたい方は新館カウンターにお申し出下さい。）

＜編集後記＞

春爛漫の図書館新館を望む

　桜の花が美しい岡田山のキャンパスをひときわ華やかに彩る季節に、２１世紀最初の新入生を迎えるＶｅｒｉｔａｓ１４号、発行の運びとなりました。新しい年度のみなさまのご活躍とご多幸を祈ります。

〈 Veritas No.14 編集委員：溝口・井出・竹中 〉